

「ルワンダ共和国における学校ベースの現職教員研修の 制度化・質の改善支援プロジェクト」 ベースライン調査補助員としての活動報告

The Project for Supporting Institutionalizing and Improving Quality of SBI Activity
～ As Baseline Investigation Assistant ～

鈴木誠司*, 山下華奈*, 藤井姿月*, 小野由美子**
Seiji SUZUKI, Kana YAMASHITA, Shitsuki FUJII, Yumiko ONO

*鳴門教育大学大学院, **早稲田大学教師教育研究所

*Naruto University of Education, **Waseda University Institute of Teacher Education

1 目的

学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善プロジェクト(The Project for Supporting Institutionalizing and Improving Quality of SBI activity)は、株式会社パデコが国際協力機構(JICA)より委託され、2017年1月から3年間の予定で実施される、国際協力(技術協力)プロジェクトである。

今回、本プロジェクトのベースライン調査のため、授業撮影、授業記録、児童・生徒・教員へのアンケート調査、インタビュー調査などの補助を行うことを目的とする。

2 日程

- | | |
|---|--|
| <p>(1) 3月12日
日本出国, ルワンダ共和国到着</p> <p>(2) 3月13日
Rwanda Education Board オフィス(ルワンダ共和国教育委員会)にて、ベースライン調査に関するオリエンテーション</p> <p>(3) 3月14日
Lycee Notre Dammes de la Visitation(中高等学校)訪問(ベースライン調査)
EP Buhande(小学校)訪問(ベースライン調査)</p> <p>(4) 3月15日
GS Notre Damme des Aotres de Rwaza(中高等学校)訪問(ベースライン調査)
Centre Scholaire Muhe(小学校)訪問(ベースライン調査)</p> | <p>(5) 3月16日
St Raphael Rambura(小中一貫校)訪問(ベースライン調査)
EP Bukinanyana ADEPR(小学校)訪問(ベースライン調査)</p> <p>(6) 3月17日
GS Nyarubuye(小中一貫校)訪問(ベースライン調査)
EP Rubengeral(小学校)訪問(ベースライン調査)</p> <p>(7) 3月18日
PCM研修(プロジェクト・サイクル・マネジメント)を通して、ベースライン調査の振り返り</p> <p>(8) 3月20日
GS Kabuye(小中一貫校)訪問(学校見学, 試験観察, 試験監督補助)</p> <p>(9) 3月21日
UMUCO MWIZA(幼稚園)訪問(学校見学)</p> <p>(10) 3月22日
GS Rugando(小学校・中高等学校)訪問(学校見学, 試験観察, 試験監督補助)</p> <p>(11) 3月23日
College Doctoria Vitae(中高等学校)訪問(学校見学)</p> <p>(12) 3月25日
ルワンダ共和国出国</p> <p>(13) 3月27日
日本帰国</p> |
|---|--|

3 活動内容

(1) 活動背景

ルワンダ共和国（以下、ルワンダ）の教育の質には大きな課題があり、学習到達度は低い現状がある。児童・生徒の学習到達度が低い原因として、教員の教授能力の不足、現職教員研修の機会の欠如、教員の教科知識の習得不足、生徒への適切な指導を可能にする良質な教員用指導書や教科書、副教材の不足が課題となっている。そこで、JICAは日本の教員教育の経験に基づいた技術協力を実施してきており、持続的な教員の授業実践改善のための校内現職教員研修（School-based In-Service Teacher Training：SBI）（以下、SBI）の導入を行ってきており、SBIは成績向上へ寄与していることが確認されたものの、各学校のSBI実施状況にはばらつきがあることも課題となっている。SBIを活用し、現在ルワンダ政府が進めている新カリキュラムである、コンピテンシー・ベース・カリキュラム（Competence-based Curriculum）（以下、CBC）の現場での実践強化を目指している（株式会社パデコ、2017）。

このSBIとCBCを基に、「学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト」として、株式会社パデコがJICAから業務を請け負っている。小野教授が日本人の教育の専門家として教育評価の担当を請け負うメンバーとなっているため、私達学生は、小野教授の調査補助員として同行し、ルワンダの各学校のベースラインデータの収集を行った。

(2) 授業観察について

授業観察では、授業構成、授業の目的、活動内容、教材・教具の使用の有無を中心に観察すると同時に、授業を受けている児童・生徒の学習態度、学習内容の理解度も含めて観察を行った。観察は、ビデオ・写真撮影や授業記録を取り、繰り返し授業内容の確認が行えるようにした。

本プロジェクトの授業観察として、8つの学校を訪問した。学校種は、小学校、小中一貫校、中高等学校である。

授業構成は、グループワーク、公式に当てはめた練習問題の繰り返しが全ての授業で見られた。授業が始まってすぐにグループワークを行うことも非常に多く、授業の「導入」が行われず授業の「展開」に入っている様子であった。

次に、グループワークについて述べる。授業観察した8校すべてでグループワークが行われていた。複数の授業では、グループワークを授業の間繰り返し実施していた。8校中6校の教員は、グループワーク実施

前に活動内容の詳しい説明や目標を指示しておらず、グループ編成も近くの児童と集まるのみで、グループごとの学力差も大きかった。グループ内で主に活動しているのは学力の高いとみられる1、2名で、他の児童は学習に対して受動的な姿勢が見てとれた。

算数の練習問題では、公式に当てはめて回答を導く繰り返しの学習であった。しかし、授業内で児童が問題に対して回答する際に、公式を間違えて覚えていたり公式自体を覚えられていなかったりする場面が繰り返し確認できた。

(3) 児童・生徒への質問紙調査・インタビュー調査（図1）

各学校へ訪問し、授業観察を行ったあとに児童・生徒への質問紙調査を行った。質問紙調査では、多くの児童が母国語の文字が読めなかったり質問の意味を理解できなかったりした。ルワンダ人が母国語を使用して口頭で質問紙の内容を説明すると、質問の意味を理解することができたため、文字の読み書き能力に課題が多いことが分かった。

インタビューでは、「学校は楽しいか」、「先生の授業は勉強になるか」、「将来何になりたいか」など、複数の設問を英語で質問した。質問紙の時とは違い、児童・生徒は笑顔を見せて大きな声で回答した。児童・生徒は「学校は楽しい」、「勉強は楽しい」、「先生が好きだ」など、全て肯定的な発言であった。「将来何になりたいか」という質問には、「医者、弁護士、教員、パイロット」などの返答であった。加えて、「なぜその職業に就きたいのか」、「どのようにしたらその職業に就けるのか」と質問を掘り下げると、児童・生徒の言葉が詰まる場面が非常に多く見られた。児童・生徒は大きな将来像を描き、学校での毎日の授業や生活を楽しみにしている。しかし、自身の将来に向けて必要な学習内容や能力など、具体的な思考には至っていなかった。



図1 児童へのインタビューの様子（小学5年生）

(4) 教員への質問紙調査・インタビュー調査 (図2)

各学校へ訪問し、授業観察を行ったあとに教員へのインタビュー調査を行った。インタビューの内容は、「CBCカリキュラムは学校の授業にとって有用な内容であったか」、「SBIは教員の授業力の向上に役立っているか」、「今後CBCカリキュラムを行う上で、ルワンダのモデルスクールになることは可能か(資金の支援なし)」等である。

最初に、「CBCカリキュラムは学校の授業にとって有用であったか」の内容であるが、教員達の答えは全員口揃えて「Yes」の回答であった。ルワンダで教育カリキュラムの改定は、CBCカリキュラムを実施する前は何十年も行われていなかった。そのような状況下で、新しいCBCカリキュラムの導入は、教員達の授業構成の編成や授業実施の意欲の向上に大きく貢献しているとの返答であった。教員達は、新しいカリキュラムを行うことで、子ども達の授業内容の理解は深まると確信しており、主体的に今後もCBCカリキュラムを基に授業を行いたいとの意見であった。

次に、「SBIは教員の授業力の向上に役立っているか」という質問であるが、こちらも皆「Yes」との返答であった。SBIを行うことで、自身のみでなく他の教員の授業内容、授業の工夫などの情報を共有できることは自身の授業力の向上につながり、学校の教育力の向上にもつながると確信していた。

ルワンダでは元来SBIの概念はなく、教員同士で授業内容や工夫していること、困っていることなどの情報を共有することはなかった。加えて、自分の授業を他人が見ることは、消極的であったとのことである。

「CBCカリキュラムを行う上で、ルワンダのモデルスクールになることは可能か(資金の支援なし)」との質問には、大半の教員達が「Yes」と返答をしたが、数名の教員達は口を濁す場面が見られた。「Yes」と答えた教員達は、自分達の学校がモデルスクールに選

ばれることにより更なる授業力の向上、自身の教員としての力を伸ばすことができると口にしていて、口を濁していた教員達は、モデルスクールになることは良いが、資金面の支援もあると助かるという意見が出た。資金面の支援があれば、教材や教具も充実させることができるかもしれないということであった。

4 ルワンダの学校教育の現状と課題

学校の施設について、校舎はコンクリート製で屋根はトタン屋根である。屋根がトタン屋根であるため、スコールが降った際の雨音は凄まじく、教員や児童・生徒の授業中の声が掻き消され、お互い目の前まで近寄らないと声が聴き取れないほどであった。

学校までの通学に使用している道路は、整備がされておらず極めて凸凹の道であった。また、地方の学校の周辺には家屋が見当たらない地域もあり、通学に数時間かけている児童・生徒もいるということであった。

電気の設備は整備が行き届いておらず、学校によっては教室に裸電球が一つのみ天井からぶら下がっていたり、電球が設置されていても電気が通っていなかったりする現状であった。その結果、スコールや悪天候の際は教室内が暗くなり、授業に支障をきたしていた。

児童・生徒が使用する机やイスは一体型となっており、机やイスが一人一人に与えられているのではなく、児童・生徒3人に対して机・イスの一体型のものが使用されていた。隣の人との距離が近いと、学習しづらい様子が見られた。

黒板に使用するチョークは、一つの学校を除いて全て白色のみを使用していた。板書したチョークを消す黒板消しは見当たらず、手やスポンジのような物で消していた。

教科書について、学校で教科書を使用して授業を行っておらず、教員が作成した指導案を基に授業を実施していた。ルワンダでは、児童・生徒に教科書は与えられていなかった。

教具に関して、学校の教具に関する設備は整っておらず、教員が自作したり身近な素材を活用したりして授業を行っていた(図3)。

授業中に使用する言語については、小学校四年生から英語である。しかし、3(3)「児童・生徒への質問紙調査・インタビュー調査」にも記述したが、母国語の読み書き能力が十分でない児童が在籍する中、英語での授業が展開されている。そのため、特に小学校の教員は英語で学習内容の説明をした後に母国語で説明補助をする場面が多く見られた。

教員の授業構成に関して、全ての授業でグループワークが取り入れられていた。また、算数の授業では、



図2 教員へのインタビューの様子



図3 身近な素材を活用して授業を行っている教員

公式に当てはめて繰り返し解答を導く方法がとられていた。しかしながら、グループワークを行ったり、公式を用いたりして練習問題を解いても、児童・生徒が回答を発表すると間違っていることが多かったため、グループワークをする意味の欠如や、公式を活用する基礎的な力が不足していた。

5 考察

授業では、児童・生徒が問題に対して主体的に考え、工夫して回答を導ける力をつけることが必要になると考えられる。そのため、教員には児童・生徒達が自ら考える力をつけるための授業内容の工夫が必要になると推察することができる。

授業内の教員の発問に関して、教師の発問に対する児童・生徒の返答は、常に「Yes」と肯定的な内容ばかりであった。また、児童・生徒からの質問に意欲的に返答をしている小学校の教員はいなかった。この現状から、教員は児童・生徒からの質問内容に否定的・懐疑的な内容は求めているように感じた。授業とは、児童・生徒が疑問に感じていることや質問にも適切な助言等で、学習内容の理解を深めていかなければならないと考えている。そのため、児童・生徒からの質問を受け入れることは当然のこととして、理解が十分でない児童・生徒に対しても理解ができるように授業を展開する必要があると言える。

児童・生徒の授業態度に関して、児童・生徒は意欲的にどの授業にも参加していた(図4)。教員の発言には注目し、教員の発問には常に大きな声で返答をし、



図4 積極的に授業に参加している生徒の様子

教員から学習内容の回答を聞かれたときは、大半の児童・生徒が挙手をして発言していた。

教員の授業に対する態度に関して、大方の教員が授業に対して情熱に溢れ、誠心誠意授業に向き合っていた。授業の質を良くしたい、自分の授業力を向上させたいという気持ちが強固であった。

ルワンダの教育の課題として、教員や児童・生徒は学ぶことに懸命に向き合っているが、現在の教育の質自体が彼らの意欲に追いついていないと感じた。今回の調査目的である、「学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト」を実施することは、ルワンダの教育の質を向上させ、教員の質も向上させる現在のルワンダの教育にとって必要なプロジェクトであると推定できる。

引用文献

株式会社パデコ (2017). ルワンダ国学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト

謝辞

今回、調査補助員としての活動を進めるにあたって、小野由美子教授はじめ多くの方々のご支援とご協力をいただきました。謹んで感謝申し上げます。

ルワンダ渡航に際しては、「ルワンダ共和国における学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト経費」(代表:小野由美子)の支援を受けた。